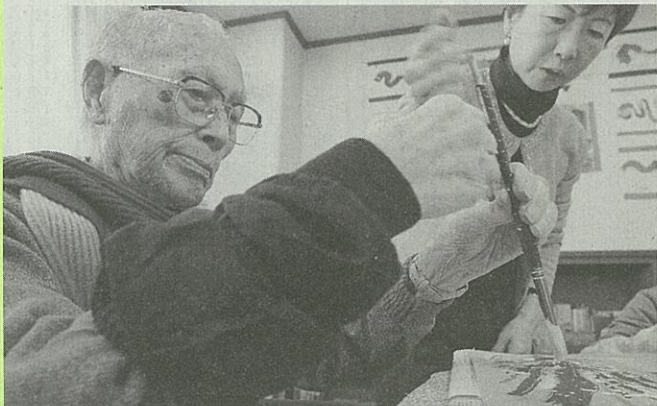


# 豊富な趣味 好奇心旺盛



104歳から始めた絵画の制作を続ける小川 光さん（東京都町田市で）＝横山就平撮影

♪雪よ岩よ我が宿り♪  
東京都町田市の有料老人ホーム「鶴の苑」に、大きな歌声が響く。絵画クラブのこの日のテーマは「雪」。メンバーは歌い、思い出話をして、雪のイメージを膨らませる。

小川光さん(108)は、10人ほどのメンバーの最年長。時には、「チョイ、チョイ」と歌に合いの手を入れるムードメーカーだ。小川さんは、色紙に墨で力強く枝を描き、白の絵の具で雪を降らせた。厳冬に

力強く立つ樹木の絵が出来上がった。作品は前に並べて、互いに良い点を褒め合う。「絵を描くのは楽しい」と、小川さんは満足げだ。小川さんが絵を始めたのは104歳の時。赤などはっきりとした色が好みで、絵は色彩豊かで若々しい。絵に添える落款の署名も、漢字やひらがな、ローマ字を使い分け、工夫する。

床美術士の浅井千歳さん(59)は「絵がデザイン的で力強い。とても108歳の描いた絵には見えない」と評価する。「年々、絵が元気になっている。体の元気を保っている秘訣かもしれない」と、次男の小川正夫さん(72)も喜ぶ。

おしゃれで服装にも気を配る小川さんは好奇心旺盛で、尺八や琴、能楽、小唄、ダンス、バラ栽培と趣味が豊富だ。能楽では宝生流のシテ方の免状、琴でも箏曲宮城社「中伝」の免状を持つ。社交ダンスは、高齢者グループの部で第1位になったこともある腕前で、103歳ごろまで踊っていた。背筋は今もピンと伸びており、車いすに乗っていても大きく見える。

東京都の職員を退職後に始めたバラの栽培で、金賞を受賞したこともある。「仕事でも、遊びでも、何でも熱中して、とにかく打ち込み方が半端じゃない」と正夫さん。

東京都立第三中学校(現・両国高校)時代に、九十九里浜で一人で遊泳中、夢中になりすぎて沖に流され、漁船に救助されたこともある。今では真偽を確かめようもないが、1人用モーターボートで当時の最高速度を出したというのが自慢だ。

関東大震災の時には、やかんと傘、たばこだけを持って逃げて、たばこを食べ物と交換して飢えをしのいだ。戦後の食料難の時には、空き地にソバの実をまいて育てて、近所の人たちに配った。

昨年10月、正夫さんが光さんの茶寿(108歳)のお祝いに、これまでの絵画作品を集めた小冊子を作り、年賀状代わりに知人たちに配った。今年7月の誕生日には、2冊目の作品集を作る予定だ。

連載「医療ルネサンス」は、月曜日から金曜日の週5回の掲載です

指導する臨

はじめたバラの栽培で、金賞

は、2冊目の作品集を作る